

一声社：TEL03-3812-0281/FAX03-3812-0537

閑話休題—恩を仇で返す①

ヨネやんがまだ学生の頃の話。

「どの授業は出席が厳しいか」「どの教授はカンニング発見に命を懸けているか」等の必要不可欠なニュースは、男子寮の諸先輩方から逐一聞かされていた。

「図工 2？ あれは楽勝や。出席取らへん。最後だけ出たらええねん」

先輩のありがたいアドバイスを律儀に守り、図工の授業に一度も出席しなかったヨネやん。最後から 2 番目の授業の後、寮生仲間が忠告に来た。

「こら！ 図工 2 の授業に出てないやろ」「ああ、あれな。出んでも大丈夫や。楽勝！」「そんな事言うて！ 来週、工作の提出やぞ！」「工作したもの、提出すんの？ えらいこっちゃ。それで…何を作ってるん？」

いよいよ最後の授業。ヨネやんが授業に出ると、他クラスの学生が次々に声をかけてきます。「お前、この授業 取ってたんか、初めて知ったで」。

0 教授が出席番号順に名前を呼んでいきます。「作ったものはこれか？ う～ん、デザインはいいが、機能的ではない。次！これは無骨だがしっかり作ってある。丁寧な仕事だ。次！これは話にならない！ダメだ！…」

いよいよ次がヨネやん番です。

「次、米山！ んん？ 君は授業で見た事がないが、影が薄いのかな？（毛は薄いけど、影は薄くないんです）。まあ、いい。作ったものを見せればよい。さあ！」

「すみません。材料の木をまだ買っていません。売ってください」

「今、よく聞こえなかった。木がどうしたって？」

「本箱を見せようにも、材料の木を買っていないので、作れへんから見せられへんです。今、売ってください」

「き・き・き・君は！ 僕をバカにしているのかあ！」—まさに怒髪天を衝く勢い。0 教授の怒りは図工室の窓ガラスを震わせ、…やがて彼は静かに言った。

「帰りなさい」。

「そんな事言わんと、売ってくださいよ—よせばいいのにまだ売ってくれとせがむヨネやんに、周りの学生達は冷や汗もの。

「君に売る木はない。売るつもりがないという事と、売る材料など無いという事だ」

「そこを何とか…」。これだけ粘るのには理由がある。この授業は必修で、単位を落とすわけにはいかないのだ。その割には不真面目だったわけだが。

「君は、いつもそうじゃないか！」—0 教授の怒りに、ふと疑問がよぎる。

「いつも？ いや、この教授の授業は初めてやし、クラブの顧問でも男子寮の顧問でもない。はて？」。頭を下げたまま考えているヨネやんの頭の上から、0 教授はこう叫んだ。

「君は入学式にも出てないだろ！ あの時もみんなを騒がせて、迷惑をかけたじゃないか！」

賢明な読者の皆さんは覚えておられるだろう。『なんでやねん 8 号・9 号』でご紹介した「あわや入学辞退」の話を。今また甦る痛恨の記憶……。果たしてヨネやんは単位を取れるのか？！ 次号に続く。

春の小道具フェア、これさえあれば 3 冊セットフェア等 まだ申し込み受付中！